



地産地匠アワード
二〇二六

LOCAL FACTORY X
LOCAL DESIGNER AWARD 2026

LOCAL FACTORY X
地産
地匠
LOCAL DESIGNER

主催・運営
株式会社中川政七商店
〒630-8144
奈良市東九条町二二二
<https://nakagawa-masashichi.jp/>



「地産地匠」Ⅱ地元生産×地元意匠。

日本のものづくりの歴史を未来に繋げる

新しいスタンダードは、産地から生まれる。

地域に拠点を置き、地域のものづくりと

関わるデザイナーの活躍が増す中、

その想いと営みを未来につなぐために。

地域に根ざすメーカーと

地域を舞台に活動するデザイナーがタッグを組み、

新たに生まれたプロダクトを募集するコンペティション。

それが「地産地匠アワード」です。

メーカーとデザイナーの

タッグに光をあてる

メーカーが持つ高い技術や、その地域ならではの素材。デザイナーの持つアイデアや生活者としての目線、そして美意識。同じ地域で、同じ風土と暮らしを共有するデザイナーとメーカーが協働してこそ新しいスタンダードとなるプロダクトが生まれると考え、2者合同チームによる応募を対象とします。

風土や手仕事を活かされた

プロダクトを募集

募集するのは、生活の中の衣・食・住に関わるプロダクト。産地で育まれる素材や、その土地の暮らしの中で育まれてきた技術・文化・風習を取り入れていることを評価します。一次審査は書類審査、二次審査はプロトタイプおよびプレゼンテーションでの対面審査を行います。

すべての受賞商品を

責任を持って販路支援

継続的な生産と販売を前提とし、産地のメーカーやデザイナーに利益が還元される仕組みをつくります。合同展示会「大日本市」への出展サポートや小売店への卸販売をはじめ、中川政七商店直営店での販売、さらに旗艦店では受賞メーカー・デザイナーを特集する企画展を実施。作られ続けること、使われ続けること、ものづくりが循環することこそが、工芸を未来へ繋いでいくと考えています。



izaiza

日本一のい草の産地・熊本県八代市で生まれた「izaiza」。最大の特徴は、伝統的な平織りではなく、い草を布に植え付ける「タフティング」を採用した点です。この独自の製法により、これまでの「畳」や「ゴザ」の概念を覆し、柔らかくも張りのある新感覚の触り心地を実現しました。また、い草の表面積が増え、綿の約3倍と言われる吸湿力や、ホルムアルデヒドを吸着・分解する空気清浄効果、そして心を落ち着かせる香りといった、い草本来の機能性を最大限に引き出しています。

八代(熊本県)

Maker_

itiiti

田中 典子／村上 貴美

株式会社 かつあき

佐藤 かつあき

Designer_

Comment_

日本一の草産地・八代から生まれた、タフティングによる新しい敷物です。い草を植え付けるという、誰もやらなかった手法。ゴザを織るには短い、成長不良のい草も活かすことができます。コントロールしきれない、い草という素材を受け止めながら、い草の当たり前を変えることに挑んだ発想と、それを実現した力は、い草の産地そのものを変えるかもしれない。新たな「地産」の地平を感じさせる、感動的な一枚でした。(審査員 大治将典)

い草、畳という工芸に関する課題は、ずいぶん前からアプローチされてきました。しかし、その多くが畳というプロダクトの枠から出られず、ライフスタイルのダイナミックな変化に追いつけずいました。本プロダクトはい草を使うが、畳ではない新たなプロダクトで、かつ、畳のポジションに近い敷物として機能しています。この大胆な転換を可能にした技術と、それを実現させた工夫に驚きと共に賞賛をおくりたいです。熊本という土地でい草や畳をすぐそばで見続けたお二方だからこそ、辿り着けた地平なんだと思います。(審査員 坂本大祐)



(1) 今では希少な国産のい草。熊本県八代市産のものを使用。(2) い草のことを熟知した二人だからこそできた、い草×タフティング。(3) 左から、デザイナーの佐藤氏、itiitiの田中氏、村上氏

詳しくは
こちら





畳文化を支えた「い草」の魅力を、 もう一度暮らしの中へ

「これ、本当にい草なんですか？」

思わずそう尋ねたくなる、一枚のラグ。熊本県八代市で育てられた「い草」を使いながら、「畳」とはまったく異なる表情を見せる新発想のラグ「i z a i z a（イザイザ）」です。名前の由来は「い草」に「座る」を意味する造語から。

い草は稲のようにすっと伸びる多年草です。優れた調湿性や心地よい肌触り、心をほっとさせる特有の香りなど、天然素材ならではの魅力を持ち、日本の畳文化を支えてきました。なかでも八代市は「い草のまち」として知られ、国内トップクラスの生産量を誇ります。

「でも近ごろはそれが教科書にも載っていないし、畳がい草から作られていることも認識してもらえなくなってきましたね（田中）」

住宅事情やライフスタイルの変化による畳需要の減少に加え、安価な輸入品の増加、市場価格の低下、い草専用の機械メーカーの撤退などが重なり、い草農家は年々減少しているのだそうです。

伯父が元々い草農家だという田中さんにとって、い草は子どものころから身近な存在でした。その可能性を広げようと、い草のアクセサリや、短くカットしたい草の断面を見せる椅子など、畳やゴザとは異なる表現にも挑戦してきました。

「伯父がい草農家をやることになった時に、自分がこの立場にいたのに、やめさせてしまったような悔しさがあって。だから、い草をつないでいかなければいけないと思いました。そのためには、まずはい草を知ってもらうことが大事です。これまでのい草のアクセサリなどを作ってきましたが、それだと女性がメインになる。もっと広く知ってもらいた



新しい挑戦を後押しした 八代への想い

佐藤さんはこれまでも、デザインを通してさまざまな社会活動に取り組んできました。

「東京や福岡など拠点を変えながら、妻の実家がある熊本に引越してきたんです。そして2016年4月に熊本で大きな地震が起きた。この大変な状況で、お世話になっている熊本に何かできないか、しなきゃと思うようになって。復興には息の長い支援活動と、多くの人の関心が必要です。クリエイティブの力が少しでも役に立てばと、地元のクリエイターと一緒に一般社団法人『BRIDGE KUMAMOTO』を立ち上げました（佐藤）」

熊本では地震だけでなく豪雨もたびたび発生し、2025年にも深刻な豪雨災害に見舞われました。八代市のい草農家も大きな被害を受け、i t i i t i i の2人も車が水没するなど、被災を経験しています。

地域全体が大きな傷を負うなか、企業から託された寄付金をどう活用するか考えていた佐藤さん。頭に浮かんだのが、八代市のい草を使って活動をしていたi t i i t i i と、新しいプロダクトを生み出すことでした。

「農家さんにトラクターを一台買ってあげられるほどの予算ではない。でも、新しいプロダクトを生み出して、産地全体を盛り上げることはできるかもしれないと考えました」（佐藤）」

い草農家を支えたいi t i i t i i の2人と、佐藤さんの思いが重なり、3人の挑戦が動き出しました。試作していたラグを「i z a i z a」へと昇華させ、「地産地匠アワード」へ応募。見事グランプリに輝き、い草の新しい可能性を広く発信するきっかけとなりました。

い草の可能性を、 未来へつなぐために

い草の田んぼの色や景色、香り、機械の音。その一つひとつが、い草とともに育ってきた田中さんの原風景。「い草」という言葉が出てくるだけで、もう、幸せですよ。その言葉から、い草への深い想いと愛情が伝わってきます。

たびたび八代を訪れながら、い草農家との関係を築いてきたi t i i t i i の2人と佐藤さん。「クリエイターとして生きているからこそ、できる支援があると思っています」と、い草の未来と産地を支える活動に力を注いでいます。その思いの先にあるのは、い草の魅力を次の世代へつなぐこと。「i z a i z a」は、今はまだ小さな挑戦かもしれませんが、けれど、一本のい草から、新しい物語はもう始まっています。

「毛糸だけでなく、い草でタフティングの体験をしてもらえたら面白いですよ。い草を『畳の材料』ではなく、自分の手で形にできる素材として親しんでもらう。ものづくりの楽しさを入り口に、地域の素材や文化に興味を持つ子どもたちが増えてくれたらうれしいです（村上）」

「八代に、い草の資料館や博物館、ショップなど、もっと見て触れてもらえる場ができるといいですね。農家さんの現場を見てもらえるツアーなどもできたら。田んぼを見たり、香りを感じたり。私たちがハブ役になって、い草の背景まで含めた体験を届けたいです（田中）」

「まだまだ魅力に変えられるものはたくさんあると思うので、それをどう形にしていくなのか考えていきたいですね。オープンな施設で触れてもらい、いろんな人がラグなどを作れるようにしたり、プロダクトを販売したり。ホテルや国際会議場、駅などでもi t i i t i i さんの作品が採用されて、多くの方に触れてもらいたい。工芸は、最初から伝統工芸だったわけではないんですよ（佐藤）」

めに、インテリアや暮らしの中で使えるものができたいいなと思って（田中）」

もっと多くの人に届けられる形を考えるなかで浮かんだのが、素材を一本ずつ打ち込む「タフティング」という技法。「タフティング」は専用の器具で布に毛糸を打ち込み、ラグやカーペットが手軽に作れるというもの。体験やワークショップでも人気を集めています。高密度でしなやかな繊維を持つ、い草の特性を活かしやすい技法でもありました。「これでラグを作ったら、い草の世界が変わるんじゃないかと思いました（田中）」

その構想が大きく動き出したのは、2026年にデザイナーの佐藤さんとコラボレーションを始めてからでした。度重なる災害を受ける熊本で支援活動が続けてきた佐藤さんは、八代市での活動をきっかけにi t i i t i i の2人に声をかけ、行動をとるように。そのなかで試作のラグを目にし、「これは新しい。広がりがある」と直感したといいます。

「い草農家さんにとっては、い草はゴザや畳表になるのが当たり前。織る素材から一本一本を主役にして、い草そのものを活かす」という使い方は、身近でい草を見てきた田中さんだからこそ生まれたもの。タフティングでラグにする発想は、畳から脱却して量産もできるかもしれない、とても新しいアイデアでした（佐藤）」

田中さん曰く「悩んでいるところの一步先のヒントをくださる存在」だったという佐藤さん。担ったのは、プロダクトそのものをデザインするのではなく「その価値をどう伝えるか」を考えるディレクションの役割でした。

新しい形を生み出すi t i i t i i の2人と、その価値を見つめ、伝え方を編み直す佐藤さん。それぞれの視点が重なることで「i z a i z a」は、畳だけではないい草の可能性を暮らしにひらく、新しい提案へと育っていききました。

メーカー 田中典子／村上貴美（i i i i）
デザイナー 佐藤かつあき（株式会社かつあき）

こちらから
お読みいただけます



SERENE

メリノウール ニューマイヤー毛布

大阪府・泉大津で毛布づくりを続ける川崎毛織。天然素材を中心に、風合いを極めるものづくりを続けてきた工場です。「SERENE」は「世界一の品質を目指す」という信念のもと生まれた毛布です。メリノ種の羊から採れる最高級の「メリノウール」のやさしい肌触りと、軽やかで包み込まれるような温もりは、ずっと触れていなくなる触り心地。深みと高級感のある黒の地糸、パイピングを無くし隅々までウールの柔らかさを感じられるようにした仕様。細やかなこだわりを詰め込んだ毛布は、毎日使うたびに、究極の心地よさを実感できる一枚です。



泉大津（大阪府）

Maker_

川崎毛織株式会社

川崎 弘治

Designer_

パンダ企画

廣瀬 友子

Comment_

産地に蓄積された技術を妥協ない品質の追求によって現代的に再解釈。老舗メーカーのものづくりの誇りを新たな価値へと昇華したプロダクトです。一人の毛布愛好家の強い思いが、量産のものづくりに長けた老舗を動かした。双方の情熱と信念を感じます。細部に至るまで徹底的にこだわり、「自分自身が本当に使いたいものをつくる」という姿勢が品質の高さにつながっています。「普通のラグジュアリー」の実現が、業界関係者や産地の人々を共感させる可能性を秘めていると感じています。（審査員 矢野直子）

触り心地が最高に気持ち良く、ずっと抱きしめていたくなる毛布でした。「量産」ときくと、品質よりも効率というイメージがあっただけに、泉大津の高い生産技術を活かして、品質やデザイン性まで追求されている点が印象的でした。また、デザインにおいても顧客の声を取り入れながら、細部までこだわりぬかれており、モノづくりへの真摯な姿勢を感じました。（審査員 長田麻衣）



1



2



3

（1）細部にこだわりを詰め込んだ、毛布愛を感じる仕上げ（2）左から川崎毛織株式会社の川崎氏、パンダ企画の廣瀬氏。（3）織り工が織り機と対話しながらつくっていく。

詳しくは
こちら



友禅アートブラウス

江戸の町人文化の中で育まれた東京手描友禅。その美意識を、現代の暮らしに寄り添うように仕立てた一着。着物を思わせる背面のフレアや、着物の柄入れを踏襲した柄の配置など、和と洋が調和し、友禅の美しさが映えるシルエットに仕上げています。柄には、女性の活躍を願うミモザやカラーの花々を選び、職人が手書きした原画をスキャンし、デジタル捺染で繊細に表現しました。東京手描友禅の美意識を未来へ受け継ぐ、新たなファッションのかたちです。



東京手描友禅

Maker_

ユキヤ株式会社

大野 深雪／町田 久美子

Designer_

KARMA et CARINA

北迫 秀明

Comment_

東京手描友禅の原画をデジタル化し、型紙に合わせて配置・捺染したブラウスです。原画を描いた職人に著作権が残る仕組みで生産され、手描きとデジタルだからこそできた新たな利益配分が素晴らしい。デザイナーの力量を感じたのは、ワンサイズで多様な体型に合うパターンです。審査会でも、誰が袖を通して綺麗に着られていました。着物を意識しすぎず、友禅を「今着たい服」へアップデートしていることに感銘を受けました。（審査員 大治将典）

東京手描友禅の魅力をそのまま再現するのではなく、デジタル技術を活用して新たなデザインへ昇華している点が印象的でした。また、原画を職人の手元に残す仕組みにより伝統技術の継承と新たな価値創出を両立している点も素晴らしいと感じました。年代や性別を問わず着こなせるシルエットも魅力です。（審査員 長田麻衣）



(1) 原画はすべて東京友禅同様、手書きで描かれる。(2) 今回使われた柄の原画。この原画を高精細なスキャンでデータ化している。(3) 左からデザイナーの北迫氏、ユキヤ株式会社の大野氏、町田氏



詳しくは
こちら



kodachi

-Shichimi Spice Holder -

地域の森林資源を軸にした循環型社会の構築を目指す「やまとわ」。「kodachi」は、森を想う料理家とタッグを組み、信州伊那谷の多様な木を使って生まれた七味入れです。一つ一つ手加工で仕上げ、木目の美しさが際立つように仕上げています。

また、食卓から森へと繋ぐプロダクトとして、地域の木を適切に使い森の循環を促し、豊かな森を未来へ繋ぎたいという願いも込められています。



伊那谷（長野県）

Maker_

株式会社やまとわ
中村 博

Designer_

蓮池 陽子

Comment_

はじめて目にした時「どうして今までなかったのだろうか？」そう思いました。それくらい自然で素直なプロダクト。形状言語的に七味入れだとわかること。そのうえで、使う際の工夫が随所に仕込まれています。ただ素材を置き換えただけでなく、よりよくなっていることに好感を持ちました。素材の循環のことはもちろん、技術の継承という側面ももっており、この小さなプロダクトに、たくさんの想いや、産地の願いが込められています。（審査員 坂本大祐）

伝統的な棗（なつめ）の技術を継承するために、現代の食文化へ転換し、地域資源・技術・暮らしを結び付けた、完成度とストーリー性に優れたプロダクトです。開閉や注ぎやすさなど細部まで丁寧に設計されており、木目の合わせを含めた仕上がりもよく、一見シンプルなデザインでありながら誕生の背景や発想に新規性を感じます。地域資源と地域の技術が有機的に結びついており、その関係性に強い納得感を感じた小さな巨人です。（審査員 矢野直子）



(1) 木を回転させながら刃物で削り出す「旋盤加工」で形を整えていく。(2) 材料となるのは小径木。伊那谷の様々な樹種の木が使われている。(3) 左から株式会社やまとわの中村氏、料理家の蓮池氏



詳しくは
こちら



kayoi 一通

菜切（なきり）／合刃（あいば）

人と道具、使い手と作り手、人と人との通い合いを生むコンパクトな包丁。越前打刃物のルーツでもある菜切包丁を軸に、現代の居住空間や食材のあり方に寄り添う取り回しの良さ、毎日握りたくなるような心地と高い切れ味の両立、そして、研ぎ直しまでを道具の一部として考えることを大切に設計されました。硬い野菜も切りやすい安心感や食材の鮮度を大切に出来る気持ち、ストレスのない研ぎ直しの工程を落とし込むことで生まれる道具を長く愛でる喜び。kayoiはそんな利便性を超えた先にある、人を想い、道具を想う、気持ちの豊かさを生み出します。



越前（福井県）

Maker_

山田英夫商店

前澤 峻

株式会社TTDS

上島 弘祥

Designer_

Comment_

日常にありそうでなかった菜切包丁に注目しその魅力を現代的なデザインと高い実用性で再発見し、使い手視点から再定義した完成度の高いプロダクトです。切れ味、グリップの握りやすさなど、ヒアリングと試作を重ねた精度の高さとは裏腹に、台所に自然となじむ佇まいは愛くるしさもあり、チャームリングな新しい存在です。（審査員 矢野直子）

越前打刃物のルーツである菜切包丁を、現代の台所に向けて仕立て直したコンパクトな包丁です。刃幅

が広いぶん断面の角度が鋭くなり、野菜がスパッと切れる。菜切のその良さを再発見した目の付け所。切りやすさはもちろん、グリップの持ちやすさまで、プロダクトとしての純粋な良さがあります。通い箱による研ぎ直しの仕組みも含めた提案です。あえて言えば、工芸的な匂いがもう少し残っていてもいい。産地らしさのエグ味も、味わいとして届くことを期待します。（審査員 大治将典）



3



1



2

（1）パッケージはコンセプトでもある使い手と作り手を繋ぐ“通い箱”になっている。（2）左から山田英夫商店の前澤氏、デザイナーの上島氏。（3）合刃包丁の製造過程。

詳しくはこちら





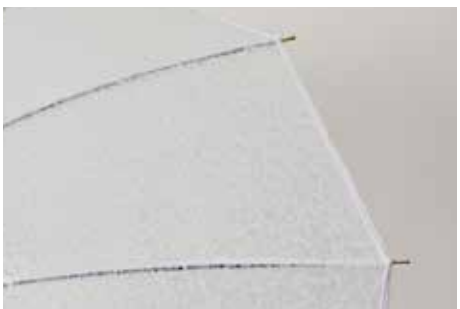
TenF -MOBILE/BENTO/TESSHU-

福島県の伝統織物「会津木綿」を使い、福祉施設で働く人たちが一反12m・幅38cmの生地一本ずつ線を描くことから生まれるテキスタイル。一人ひとりが描く線が重なり合い、世界にひとつだけの表情をつくり出します。その生地を活かした縫製仕様にする事で、多くの人がものづくりに関われる仕組みも実現しました。つくる人の喜びと、使う人の心が弾む体験をつなきたいーそんな想いから福島県の福祉施設とTULIP EN MENSENが立ち上げたブランド「TenF」。この想いから生まれた、つくり手と使い手の心の潤いも生むプロダクトです。

Maker_ 福島県授産事業振興会 前林 忍
NPO法人銀河の森福祉会 銀河工房
社会福祉法人心愛会 コパン・クラージュ

Designer_ TULIP EN MENSEN
横山 英也

Producer_ 合同会社アレコレ
迫 一成



極薄和紙の雨傘

ともすれば少し憂うつになりそうな雨の日。そんな日に、うっすらと和紙を通す優しく柔らかな光に包まれることで、少しでも誰かの心が安らいでほしい。そして、その安らかさをもたらしてくれる和紙の美しさを知ってほしい。そんな想いから生まれた和紙の雨傘です。生地を使用しているのは、抄いたばかりの和紙に水を落として水滴模様をつけた「落水紙（らくすいし）」。その中でも極薄の和紙を使い、そこに薄くラミネート加工を施すことで、いままでない和紙の雨傘になっています。デザイナーとメーカーがタッグを組み、10年かけて商品化が実現しました。

Maker_ 株式会社 小川
小川 恭令

Designer_ 優雨 yasasame
名倉 奈央子

プロダクトデザイナー／
統合デザインディレクター
Oji & Design／Oji & Co. 代表

大治 将典



一次審査の段階では、正直、小粒な年かと感じていました。しかしその印象は、実物を前にした二次審査で大きく覆されます。地味でも、足腰の据わった取り組みばかりでした。今回強く感じたのは「おもねらない」ことの大切さです。作り手が使い手を勝手に想定し、仕様やサイズや価格を小さくまとめてしまいうことは、「良きものを使いたい」という使い手の気持ちを抑え、使い手が変わる機会を奪ってしまいます。それでもうひとつは、デザインとクラフトのバランス。デザインはコントロールする術、クラフトは受け止める術。両者は対立するものではなく、常に同時に存在するものです。大量生産がクラフト性を最小化してきた時代のなかで、このバランスを取り直し、クラフトの力を社会が取り戻していくこと。それこそが「産地地匠」の使命ではないかと、勝手に思っています。その一助となるべく、ここから生まれたものづくりへの支援を、これからも広げていきたいと切に願っています。

クリエイティブディレクター
合同会社オフィスキャンブ

坂本 大祐



産地地匠は今回で三度目の授賞式を迎える。初回から審査をさせていただいていることで、各回の変遷とともに、日本のものづくりや、地域を対象にしたデザインのたゆまぬ進歩を見せていただいて、毎回胸が震えたと共に、未来への希望をより強く感じている。初回から一貫してある「産地に於ける原料の循環」という視点に加えて第二回では「プロダクトデザインとしてのよさへの回帰」そして本年に関しては「イノベータータイプなアプローチ」を見せていただいた。工芸とイノベータータイプは一見対極にあるように感じるが、時代や生活の変化に、細やかに対応してきた、或いは対応しやすいのは、実は工芸なのではないか？そう思わされた。原料の調達あるいは生産から技術、工作機械など、ものづくりの一連のプロセスが近接している産地だからこそ、イノベータータイプなアイデアにチャレンジしやすいのではないだろうか？またその産地に寄り添っているからこそ見えてくるデザイン・クリエイティブの視点やアプローチ。これからの日本のものづくりの未来にわくわくしている。

積水ハウス株式会社
フェロー／P&O本部

矢野 直子



今年の受賞作に共通していたのは、地域に根差した素材や技術、文化に対して真摯に向き合いながら、その価値を現代の暮らしの中で再編集し、新たな可能性を切り拓こうとする姿勢でした。伝統を守ることに留まらず、異分野との協働やデジタル技術の活用、用途の再発見などを通じて、産地や工芸の未来を更新する挑戦が数多く見られました。

特に印象的だったのは、制約を創造の源泉へと転換している点です。素材や技法が抱えている課題を乗り越えるための試行錯誤や、細部への徹底したこだわりが、単なる機能やデザインの向上を超えた新しい価値を生み出していました。その背景には、産地を残したい、技術を継承したい、あるいは本当に使いたいものを届けたいという作り手たちの強い意志があります。そしてそれを叶えるのは、大量生産でも一品生産でもない、作り手と使い手が納得するちょうどいい「適量」。この意味を静かに素直に発信してくれる意志を感じました。

又、どの作品にも共通していたのは、プロダクト単体の完成度だけでなく、それを生み出した地域や人、ものづくりの物語まで含めて社会に提案していることです。こうした取り組みが広がることで、工芸や地域

産業は単なる継承ではなく、時代に応答しながら進化し続ける存在であることを改めて教えてくれました。今回の受賞作は、その未来への可能性を力強く感じさせてくれました。

マーケティングストラテジスト

長田 麻衣



今回で二回目の審査員参加となりましたが、特に二次審査でのプレゼンテーションはどれも熱意にあふれ、多くの刺激をいただきました。審査を通じて改めて感じたのは、「作り手にも買い手にも無理のないプロダクト」の大切さです。産地の技術や伝統を残したいという思いや、自分たちが良いと思うものを届けたいという情熱は重要ですが、どちらかが相手の事情を背負いすぎると長く続く関係にはなりません。また、「こんな組み合わせで課題が解決するのか」と驚くような協業も多く見られました。伝統を未来へつなぐためには、残すべきものとアップデートするものを見極め、仲間が参加しやすい仕組みを広げていくことが重要だと感じました。

審査レポート
記事はこちら



審査員座談会
映像はこちら



ABOUT

募集概要

応募資格

地域に根ざすデザイナーとメーカーの2者合同チーム

募集対象

日本各地の風土や手仕事を活かされたもの

(衣食住に関わるプロダクト／食品は対象外)

審査の重点ポイント

- 一、【地産】地域に根ざすメーカーが培ってきた技術や、その土地の文化・風習などが活かされていること
- 二、【地匠】産地・地域へのコミットがあること、産地の人たちのことを考えてデザインをしていること
- 三、両者が協業することで、新しいスタンダードとなるプロダクトの可能性が生み出されていること
- 四、継続的な生産と販売ができ、日本各地の使い手に届けていく志があること

受賞後

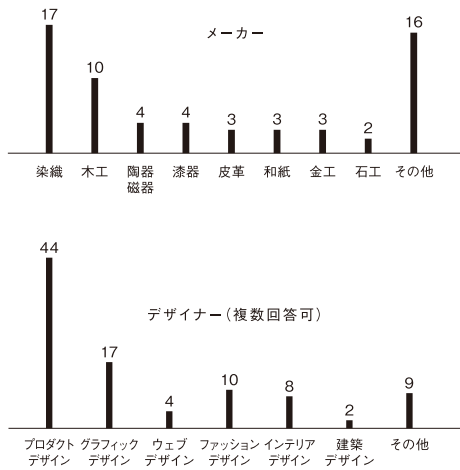
すべての受賞商品を責任を持って販路支援(審査員奨励賞は販路支援以外の形でサポートを行う)

地産地匠アワードは、地域に根ざすメーカーとデザイナーがつくる、新たなプロダクトを募集するアワードです。全国各地の風土や手仕事をいかすものづくりを発見し、販売を通じて作り手へ還元することを目指します。

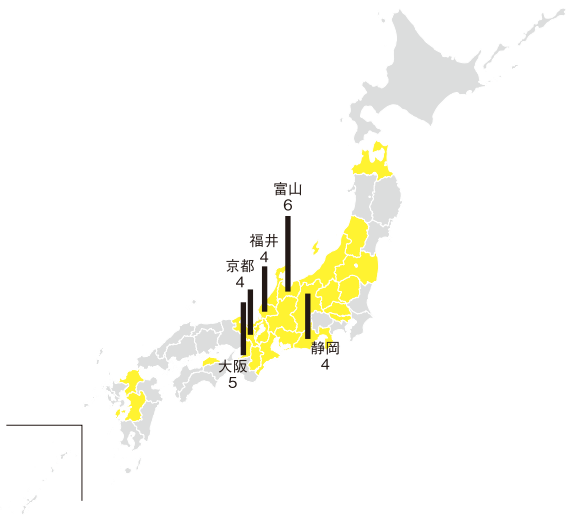
2026 AWARD

審査結果

商品応募者カテゴリー



応募地域



SALES

販売実績

受賞商品は2026年10月中旬に中川政七商店 直営店とオンラインショップにて販売を予定しております。過去の主な販売実績は以下の通りです。

- ・2024年度グランプリ「めぶく弁当」初回生産数100個が3ヶ月で完売。
- ・2024年度準グランプリ「わっぱのケース・バスケット」地元静岡の店舗で他店の3倍の売上を記録。
- ・2025年度グランプリ「大門箸」販路支援前から比べて、売上が20倍に増加。
- ・2025年度優秀賞「三河軍手」販売から1ヶ月で100万円超の売上を達成。



SUPPORTERS

地産地匠アワードサポーター(協賛)

S-PAL

仙台ターミナル株式会社

中日ビル

中部日本ビルディング株式会社

👑 グランプリ 2025



吉野箸（奈良県吉野郡）

大門 箸

Maker_

株式会社廣箸

中磯 まき子

Designer_

A4／ホームン

菅野 大門

👑 準グランプリ 2025



久留米緋（福岡県八女市）

KOHABAG

・久留米緋・

Maker_

下川 織物

下川 強臓

Designer_

HanaMaterialDesign
Laboratory 株式会社

光井 花

👑 優秀賞 2025



三河紡績（愛知県三河）

三河 軍手

Maker_

石川 メリヤス 有限会社

大宮 裕美

Designer_

Rosey Aphrodina
久保田 千絵

👑 優秀賞 2025



泉州ニット（大阪府泉州）

スパイラルインナー

Maker_

株式会社 アイソトープ

浅田 好一

Designer_

特定非営利活動法人

ユニバーサルファッション協会

川村 岳彦／錦織 悦子／
佃 由紀子

地方独立行政法人

東京都立産業技術研究センター

加藤 貴司

👑 グランプリ 2024



会津漆器（福島県 猪苗代地域）

めぶく弁当

Maker_

漆とロック株式会社

猪苗代漆林計画

貝沼 航

Designer_

Helvetica Design 株式会社

佐藤 哲也

👑 準グランプリ 2024



木工産業（静岡県）

支障木プロジェクト

わっぱのケース・バスケット

Maker_

株式会社 iwakagu

岩崎 翔

Designer_

OTHER DESIGN
西田 悠真

👑 優秀賞 2024



越前瓦（福井県 越前市）

越前 瓦器

Maker_

株式会社 越前セラミカ

石山 享史

Designer_

高橋 孝治
高橋 孝治 デザイン事務所

👑 優秀賞 2024



桐生織物・刺繍（群馬県 桐生市）

トリプル・オウ
刺繍ポシエット

Maker_

株式会社 笠盛

野村 文子

Designer_

株式会社 笠盛

片倉 洋一